

山と博物館

第45巻 第7号 2000年7月25日 市立大町山岳博物館

企画展「山川勇一郎の世界 ―山岳風景と中国の風物―」について

大町山岳博物館

山川勇一郎は山をモチーフにした作品を多く残しています。なかでも、描く対象を前にして、感じるままに画線を走らせたスケッチにこそ最もよく特色が現わされているといえます。

スキーと山旅をこよなく愛した山川勇一郎は、一九〇九（明治四二）年に神戸で生まれました。東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業後、安井曾太郎に師事し、一水会、日本山岳画協会などの会員となります。一九五八（昭和三三）年、当時話題となったネバールのジュガール・ヒマール探査行に作家深田久弥、医師古原和美、写真家風見武秀とともに参加し、ヒマラヤの山や風物を画きとめています。その後、一九六五年（昭和四〇）、大阪府連岳友クラブ中央アンデス登山隊に同行しますが、チリのセントラル・アンデス、ロマ・ラルガ氷河のクレバスに吞まれ、その生涯を閉じることになります。

旅と山行を繰り返した画家人生でしたが、空白の時代ともいえる若

き日々がありました。一九四〇（昭和一五）年、上高地徳沢の小屋にて召集令状を受けた山川勇一郎は、兵士として中国に渡ります。その頃に描いた山とは異なるモチーフの作品群は、山岳画家として位置づけられることの多い山川勇一郎の違う一面を見せてくれます。

今回、企画展「山川勇一郎の世界 ―山岳風景と中国の風物―」と題し、山をモチーフにした油彩と、山川勇一郎が若い頃に中国の済南、北京を中心として描いた人物や街並のコンテや水彩約八〇点を展示します。中国時代の作品は、現在までほとんど公開されておらず、このたびご遺族のご厚意により多くの方にご覧いただける運びとなりました。本展では山岳風景画とともに中国の風物画を紹介することによって、「山岳画家」のみではなく、「一画人」としてとらえた山川勇一郎の世界を明らかにしようとするものです。なにとぞご高覧のほどよろしく願ひ申しあげます。



前門大街（北京）

山川勇一郎 作

ニホンカモシカの呼び名と語源 —百六十三種の分類— (完結編) ③

北村 嘉 寶

66、イッボン

一本立ちの角をもった鹿という意の隠語。

奈良(吉野)

⑤仲西政一郎「奥高野の狩りの話」(あしな) 15 (山村民俗の会、一九四九年)

67、シマシカ

近世の文献に初出する呼び名で、当時の薬舖(薬局)で呼ばれていたもの。語源を明記したものはないが、推測するに角の付け根部分には、縞模様(横じわ)があるので、シワシカと呼んだのが、シマシカに転訛したか、最初から縞のあるシカ→シマシカと呼んだかのどちらかであろう。

⑥小野蘭山ほか「本草綱目記聞」(二七九一年)

68、タンカク

漢字表記では単角。一本角と同義語の隠語。大分(宮崎(祖母山・傾山))

⑦尾口村史編纂専門委員会編「石川県尾口村史 第一巻」(一九七八年)

69、ツノ

カモシカは鹿と違って、牝でも角を生やしている風変わりな獣という意の隠語。石川(石川)・長野(北安曇)

⑧尾口村史編纂専門委員会編「石川県尾口村史 第一巻」(一九七八年)

70、ツノポー

角が役に立つ(風邪薬) 奴(こいつ)という意の隠語。ポーは群馬の方言で、例えば新潟の人を「越後ポー」と呼び、ポーは人とか、者、物をさす接尾語として使っている。群馬(利根)

⑨吉野秀市氏の書簡による。

71、クロ

体毛が黒色で、角も漆黒色のカモシカに対してクロと呼んだ隠語。長野(下伊那・茅野、

岡谷・諏訪)、三重(亀山・三重)、奈良(吉野)・大分(宮崎(傾山))

⑩松山義雄「続々狩りの語部」(法政大学出版部、一九五八年)

六、他の動物呼称転用系統の呼び名

(一) 鹿系統

72、シカ

カモシカが禁獣になったため、上略称してシカと呼び、また鹿の名をそのまま転用した隠語。マタギがシカと言う場合には、カモシカの牡をさす。山形(西置賜)・群馬(利根)

⑪小野進「秋田県・奥羽北海の動物を語る」(小野進著作刊行会、一九三四年)

73、マシカ

真鹿(鹿) が棲んでいない場合の呼び名で方言。分布地域の点から考えると、「シマシカ」・「カマシカ」の上略称とも判断される。大阪

⑫文獻44に同じ。

74、カゴ

里言葉の鹿子(シカの仔)を転用したマタギ言葉。宮城(仙台・栗原)・福島(伊北)

⑬金子総平「南会津北魚沼地方における熊狩雑記」(アチツク・ミューゼウムノート13) (アチツク・ミューゼウム、一九三七年)

75、マツカ

真鹿の「シ」を「ツ」に代えてマツカとしたか、あるいはカモシカの棲む森林には、マツカ(又になった木)があるので、これを転用したマタギ言葉。宮城(栗原)

⑭「宮城県史」(一九六〇年) 語源は県史編纂室のご教示による。

76、カノシシ

鹿の呼び名をカモシカに利用した隠語。徳島(剣山(大歩危)・大分(熊本・宮崎))

⑮黒川義太郎「動物談叢」(五月書房、一九七四年)

77、カノシカ

地方(岩手・奈良など) によっては、鹿の呼び名となっているが、四国や九州ではカモシカをいう隠語。徳島(剣山(大歩危)・大分(宮崎))

山口迪氏の書簡による。

78、カノコ

鹿の仔をカノコと代えて、隠語とした呼び名。福島(南会津)

⑯山口迪氏の書簡による。

79、カムシコ

「カノシカ」が訛ってカムシコとなったか、当初からカムシコとしたのか不明。宮崎(西臼杵)

山口迪氏の書簡による。

80、ヂシカ

地着の鹿がいなくて、渡り鹿だけいる地域では、隠語としてカモシカを地鹿という。山梨

⑰白井邦彦「カモシカの方言」(動物文学 29(2)) (動物文学会、一九六三年)

81、カンチヨ

通常は鹿の異名であるが、宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町鞍岡本屋敷付近では、カモシカの呼び名になっている。宮崎(西臼杵)

⑱樋口信義「市房の自然」(自費出版、一九七八年)

82、シカケ

「シカ」と同様、牡(成獣)をいうマタギ言葉である。牝の呼び名には熊を用いた「クマン」があるので、牡に対しては鹿を用い、接尾語にケをつけてシカケとしてシカケにしたのではなからうか。福島(南会津)

⑲羽田健三ほか「会津駒ヶ岳周辺におけるカモシカ、クマ、サル」の生活について

(一九六二年)

(三) その他の動物系統

83、カントクさん

毎日、一定の場所(造林作業現場)にカモシカが現われて、作業員の動きをジャイッと凝視している姿から「監督さん」と呼んだ隠語(愛称)。福島(和歌山(西牟婁))

⑳宇江敏勝「山人の記」(中央公論社、一九八一年)

84、オヤジ

カモシカを尊んで呼んだ隠語で尊称。長野(大町・北安曇(諏訪))

㉑信州哺乳類研究会編「長野県動物図鑑」(一九七八年)

七、形態系統の呼び名

85、リュウメ

岩場で駿足を見せるので、極めてすぐれた馬、駿馬の意味をもつ。竜馬に例えた方言。富山(黒部)

㉒玉井敬泉「白山の歴史と伝説」(一九五八年)

86、ラッシュヤメン

ふさふさとした毛をもつカモシカの姿は、派手な恰好をしたラッシュヤメン(西洋人の妾)に似ているので、そのまま隠語として用いたもの。秋田(由利)

㉓武藤鉄城「秋田マタギ問書」(慶友社、一九六九年)

87、カラシシ

漢字表記で唐獅子。中国(中華人民共和国)で中国風に表現された外国獣ライオンに対する和称である。カモシカをカラシシと呼んだのは、①日本に棲む他の動物に比べると、異様な風体であるため、唐のシシ(ライオン)と呼んだ。②雪中のカモシカは、あこひげが凍りついて走るたび、カラカラと音をたてることからカラシシと呼んだ。③カモシカの

【毛】の字が誤記されたか、または隠語化する
ため、敢えてラに変えた等の諸説があるが、
明確な資料はない。

分布地域は一応、宮城としておく。

⑧佐々木喜一郎『宮城県史』15（宮城
県史刊行会、一九五六）

88、マタポー

足の爪が割れて、又になている奴という意の
隠語。群馬（利根）

吉野秀市氏の書簡による。

89、ウシ

カモシカは牛科の動物であり、角は小型であ
るが、牛に似ているということから名付けら
れた隠語。

かつてはヤマノウシと呼んでいたが、役牛
（農耕牛）が減少したので、上略称して単に
ウシと呼ぶようにしたという。三重（熊野）
辻本力太郎氏より聴取。

90、ウシオニ

「形、飼牛と同様にして角あり、毛並みは
伸々綺麗にしてつるつるとし、人を害せず、
草、木の葉をすべて喰いとる。これウシオニ
（牛鬼）なり云々」という記録がある。形全
体は牛に似ており、頭には二つの角があるの
で牛とし、しかも鬼に似た角ということ、
ウシオニにしたと考えられる。奈良（吉野）

⑨津田松苗・小清水卓三『十津川』（奈
良県教育委員会事務局文化財保護局、一九六
二）

91、カモプタ

毛深くて、コロコロして丸っこく見え、豚に
似ていることから名付けられた隠語（愛称）
である。岐阜（恵那）

⑩大作栄一郎『カモシカ撮影行 みどり
26（12）』（林野弘済会名古屋支部、一九七四）

八、行動系統

92、マワリジン

旧二月を過ぎると、カモシカはそろそろ、山
を歩きまわる習性があるので、廻りジンとし

たマタギ言葉。秋田（仙北）

⑪武藤鉄城『青シシの話』「旅と伝説」
（5）（三元社、一九三三）

93、オドリジン

人が異装（扮装）して踊りながらカモシカに
近づくと、それに見とれて動かずにいること
から名付けた隠語（愛称）。因みに慶永の
「古今功紙次第第二十三箇條」を見ると、
「カモシカ」というもの、イワツツジ（注：帯
紅白色の小花が咲く）を見て舞いまい」とあ
るが、カモシカが永い冬から解放され、跳
する春先の行動をみて、舞うと表現したので
あろう。オドリジンといつても、人間の方が
踊るわけである。福井（立石半島）

⑫柳田国男『山村語彙』「山林」（大日本
山林会、一九三二—一九三三）

94、ウタシシ

早乙女（田植えをする若い女）が、歌いなが
ら田植えをしていると、カモシカが近くの岩
場に立って、ジイッと歌にききほれてい
ることから、歌の好きなシシという意味で呼ん
だ隠語。福井（立石半島）

⑬林清一『敦賀半島とカモシカ』（敦賀
市教育委員会、一九六一）

95、ノロ

ノロマな動きの獣という意のマタギ言葉。
今ひとつは、隣接県（新潟）のカモシカの呼
び名「ノロジカ」の下略称かとも考えられる。
秋田（北秋田・仙北）

⑭武藤鉄城『玉川部落の話』「旅と伝説」
15（10）（三元社、一九四二）

96、ノロジカ

ノロマのノロと鹿とを組合せたマタギ言葉。
新潟（岩船・北魚沼・中魚沼・南魚沼・十日
町）

⑮風間辰夫『三面のマタギ物語』「狩猟
界 26（4）」（狩猟界社、一九八二）

97、ノラシシ

のらくらしている犬という意で、ノラシシ
とした隠語。秋田（北秋田）・埼玉（北葛飾）

文献73に同じ。

98、アホ（アホー）

カモシカの無警戒さに対する蔑称で、阿呆を
転用した隠語。岐阜（恵那）・三重
⑯伊藤武吉・角田保『カモシカ中間報
告』（日本カモシカセンター、一九六九）

99、バカシシ

カモシカは、山中で突然出会った場合でも、
余り遠くへ逃げることもなく、人が接近して
もジイッとしていて、捕えやすいので、馬
鹿な犬という意の隠語（蔑称）。富山（中津
川）

文献93に同じ。

100、ヒョウロク

カモシカは一見したところ、愚鈍に見えるの
で、里言葉の表六・表六玉（愚鈍な人を罵
つていう言葉）を語源にしたマタギ言葉。新
潟（岩船）

⑰森谷周野『三面のスノヤマ』「蒲原別
冊」（新潟県民俗学会、一九七八）

101、オカル

なんとなく女性的で、楚々とした風情があ
り、またとなく、あどけなくて可愛い奴
という意味をこめた隠語（愛称）。岐阜（安
八）

⑱牧野典彦『犬が吠えたら熊が出た』「全
猟46（1）」（全日本狩猟倶楽部、一九八一）

102、オバケ

猪や鹿狩の折、カモシカが思わぬ時にヌツ
と姿を現わし、猟師をびっくりさせたり、ま
た誤って射殺したりすると、恐い目に（警
察沙汰）にあうことなどからオバケと呼んだ
隠語。岐阜（安八）

文献96に同じ。

103、タッコアオ

人間を見ても、タッコ（木の根っこ）のこ
とのように、ジイッと動かないでいるこ
とから、里言葉のタッコに「アオ」をつけて
タッコアオとしたマタギ言葉である。新潟
（中蒲原）

⑲佐久間惇一『狩猟の民俗』「民俗民芸
双書 96」（岩崎美術社、一九八五）

104、タツコ

「タッコアオ」の下略称であるが、最初か
らタツコと呼んでいたとも考えられる。新潟
（中蒲原）

文献92に同じ。

105、ワカシシ

ワカシシ（若犬）といえば、仔を想像する
が、四一五才（成獣）をいう隠語である。お
そらく、隣接県（富山）の「バカシシ」の呼
び名をワカシシと聞き誤り、そのまま長野に
定着した可能性が高い。長野（大町）

⑳高橋秀男『カモシカを追って』「山と博
物館9（4）」（大町山岳博物館、一九六四）

106、バタバタ

カモシカが、岩から岩へと跳ぶときに足を
振るわす音が、バタバタと聞えることから、
その音を擬声語とした呼び名で隠語。宮崎
（大崩山）

㉑小野勇一ほか『大崩山カモシカ調査報
告』「大崩山学術調査報告」（一九七二）

九、鳴き声系統の呼び名

107、ナキクラ

牝（成獣）をいう隠語。四月上旬頃、一仔
を産んで仔連れとなった牝は、キヤツ、キヤ
ツとよく鳴くので、よく鳴くクラシシの意で
名付けたもの。（牝はあまり鳴かない。）栃木
（日光地方）

㉒下村兼史『原色狩猟鳥獣図鑑』（二九
六五）

108、ダマリクラ

仔連れの牝にくらべ牝は、あまり鳴かない
ので、黙っているクラシシという意でダマリ
クラとした隠語。栃木（日光地方）

文献98に同じ。

109、シツケイ（シツケイ連れ）

マタギ言葉では仔を、隠語では親仔一対
（仔連れ）をいう呼び名である。

シッケイの語源はカモシカの親が怒って鳴く声、シユシユシユ、仔はケエケエケエと鳴くことから、両方の声を併せてシユケイと呼び、それが転訛してシッケイになったという。シッケイ連れともいう。

一方、マタギ達が仔の呼び名をシッケイとしたのは恐らく、彼等が群馬地方に出猟してきた時に知ったシッケイを仔の呼び名に転用したのではなからうか。群馬〔利根〕・福島〔南会津〕・宮城〔白石〕

隠語について：⑧中村謙『羚羊の話』(一九七三)・⑨小林二三雄『利根川源流のまもしか』(一九七三)

マタギ言葉について：文献⑤に同じ。
110、チャチャ
体色と鳴き声とを語源とした隠語(愛称)。

カモシカの体毛には黒青色、茶、灰色と館色の強いもの、白色系のものなどがある。

鈴鹿山系には、概して茶褐色の個体が多いので、茶々という隠語にしたか、あるいは逃げる時の鳴き声、シャツシャツをチャチャという擬声語にしたか、どちらかであろう。三重・滋賀(鈴鹿山系)

⑩角田保「カモシカ保護の緊急・恒久対策を練る」『カモシカ(2)』(日本カモシカセンター、一九七六)

111、シヤンシヤン
追われて逃げる親は、シャツシャツと鳴くことから、シヤンシヤンという擬声語としたもので隠語。和歌山〔東牟婁〕

現地で聴取。
112、シヤン
「シヤンシヤン」の略称。和歌山〔東牟婁〕

現地で聴取。
113、シヤンコ
「シヤン」に指小辞のコをつけて愛称的に呼んだもの。和歌山〔東牟婁〕

現地で聴取。
114、グラグラ
カモシカの鳴き声には、フシユツ、ケエケ

エ、ギアヤーギアヤーのほか、沢山あるが、ガラガラとも鳴くので、当初はガラガラと呼んだのが、訛ってグラグラになったと考えられる隠語。群馬〔利根〕
呼び名は白井邦彦氏の書簡による。

十、体色系統の呼び名
(一)青系統
115、アオシカ
『伊豆国産物帳』(一七三六年)に収録されている。この当時はカモシカは禁獣ではなかったから方言であったと考えられるが、東日本(方言分布上)に広く分布している。青森〔中津軽〕・群馬・新潟〔岩船〕・山梨〔中巨摩・南巨摩〕・静岡
文献⑧とする。

116、アオ(アウオ)
体色が似ていることから黒馬になぞらえた隠語。アオはもともと、青色の馬をいうが、江戸期から昭和初期にかけて東北の馬産地では、黒馬をアオと呼んでいたからであろう。このほか、語源として①肉が少々あお臭いこと、②皮をなめすと皮裏が青くなること、③顔の色が帯青色を呈すること、④体毛に時折、紫黒色の毛が混じり、遠望すると蒼く見えること、⑤体毛に綿毛が多いので冬期には、毛の中が青く見えることなどが、語源だとする説がある。

また、古代日本の色名に明・暗・顕・漠があり、古くはカモシカの体色から漠と呼んだとするもの。「アホ」の訛ったものとする説などがある。青森〔東津軽・西津軽・南津軽・中津軽・三戸〕・秋田〔山本・雄勝・仙北〕・岩手〔和賀〕・山形〔東根・西田川・西置賜〕・宮城〔白石・刈田〕・福島〔耶麻〕・新潟〔北蒲原・中蒲原〕・長野・滋賀〔甲賀〕

⑪菅江真澄「雪の道奥」、「雪の出羽路」『真澄遊覧記』(一八〇一)
注：アウオの語源はアオと同一で、オを発

声するときの「生み字」のウの音が、特に強調されたもの。共にマタギ言葉であるが、新潟県北蒲原郡赤谷郷、青森県西津軽郡の一部では、方言となっている。
⑫後藤興全『又鬼と山窩』(書物展望社、一九四〇)

117、アオシシ
シシ(空)はもともと、肉を意味しており、主として肉食獣をさす。「アオ」と空を組合せたマタギ言葉である。青森〔中津軽・西津軽・南津軽・北津軽〕・秋田〔北秋田・山本・雄勝〕・山形〔東根・東田川・西村山・東村山・最上・西置賜・鮎海・尾花沢〕・岩手〔岩手・下閉伊〕・宮城〔白石・刈田・栗原・加美・王造・仙台〕・福島〔耶麻・南会津・西会津・河沼〕・新潟〔中蒲原・東蒲原・北蒲原・北魚沼・岩船〕・群馬〔利根〕・山梨・富山〔立山〕・長野

⑬「蒲原郡小川荘間組滝谷村産物」『享保・元文諸国産物帳』一七六一―一七四〇
118、アオシ
「アオシシ」の下略称で隠語。福島
文献⑬に同じ。

119、アオシコ
体毛が、晴天時のうすい空色に似ているところから名付けられたもので、アオの鹿がアオの鹿となり、さらにアオシコと訛った隠語。福島〔南会津〕

山口迪氏の書簡による。
120、アオタ
「アオ」と、女の卑称であるメンタなどに使われる「ンタ」とを組合せ、アオシコとしたのが、アオタに訛った隠語と考えられる。秋田

⑭西海富雄「熊の出る秋」『全狐17(11)』(全日本狩猟倶楽部、一九五二)
121、アオス
橋本賢助の『山形県の哺乳類』(一九三九年)に収録されているマタギ言葉である。アオと後述のスとを組合せたものか、アオ

シシの転訛したものかの、どちらかであろう。岩手・新潟
文献⑭とする。
122、アエメ
夫婦連れをいうマタギ言葉で、アオシシのアオと、夫婦のメとを組合せた呼称。秋田〔雄勝〕

⑯菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」(自費出版、一九五〇)
123、アノ
マタギ言葉で、大型のカモシカをいう。中位の大きさのものはホノという。語源不詳。秋田〔仙北〕
文献⑯に同じ。(三重県在住)

本文に関する問合せ先
千五九一三四〇三 三重県北牟婁郡海山町上里三七六
電話 〇五九七三六一―一三三四

お知らせ

本誌一ページで紹介したとおり、大町山岳博物館では企画展「山川勇一郎の世界―山岳風景と中国の風物」を左記のように開催しています。

会 期 平成二年七月九日―九月三日(日)
開館時間 午前九時―午後五時(入館は四時三〇分まで)
休館日 会期中は休館日なし
入場料 常設展と共通
大人四〇〇円 高校生三〇〇円 小中学生二〇〇円
(三〇名以上の団体は各五〇円割引)

山と博物館第45巻第7号
発行 千野長野県大町市大字大町八〇五六一
市立大町山岳博物館
TEL 〇二六―一三二一〇二二
FAX 〇二六―一三二一〇二二
印刷 大糸タイムス印刷部
定価 年額一、五〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号 〇〇五四〇七七一三三九三